

## 歴史 1 2024S オムニバス

文科一類 池田

2024 年 S セメでは、歴史学についてのオムニバス講義が開講された。本講義は、駒場の歴史教員の 5 名（黛秋津、田中創、伊坂理穂、杉山清彦、中野耕太郎）が 2 回ずつ授業を行うというもので、内容は歴史の具体的な内容というより、歴史の学び方という抽象度の高いものである。テストは担当教員がそれぞれ問題を持ち寄ったもので、受講生はそこから解きたい大問を選ぶ形式。2 問の本格的な論述で、文字数の合計は 800 字。対策としては、教科書に指定されている本を丁寧に読み、自分なりに各章で言いたいことを理解しておけば問題ない。一つの章だけ詳しくなっておけば問題ないのでは、と考えるかもしれないが、期末テストにおいてその章の問題が”アタリ”かどうか分からない。このシケプリでは教科書で大事だと思われる箇所を箇条書きにしておいた。ぜひ参考にしていいただければと思う。

私は今回のテストで駒場を卒業し、文科一類から経済学部に進学する。前期過程ではほとんど授業行かなかったが、数々のシケプリに助けられた。誰かのお役に立てば嬉しいです。

### 第 3 章：時間をどう把握するのか、暦と歴史叙述

一言要約：歴史的事実の時間的前後関係を追うのは、歴史学の基礎となる作業であるが、実は暦などの時間軸は恣意性を帯びたものであるため、時間軸を絶対視せず注意深く検証する必要がある。

- 太陰暦は月のサイクルを重視し、季節の周期を考慮しない。年は季節や星空とは直接的には関係がなく、通例は機械的に 12 ヶ月を 1 年とするため季節とのずれが生じる。太陽暦は 1 年を 365 日にして季節感と暦が合うことを重視するが、この場合月の満ち欠けは反映されない。
- 太陽太陰暦は、太陰暦を 1 年ができる限り季節の移り変わりと会うように調整されたものである。この方法として 2 年に一回 22 日の閏月を挟むことで調整する。19 年に 7 回閏月を挟むという方法も存在し、これを古代ギリシアではメトン周期、中国では章法と呼んでいた。
- 暦には、いかなる集団としての記憶を築きたいかという地域ごとの歴史的選択や、各地域における人と文化の交流や慣習の歴史が込められている。例えば、ローマ共和政では 1 週間が 8 日であることや民会開催可能日などと日付を対応させていくところに多分に習慣的な要素が認められ、時間の区切りの恣意性が確認できる。
- 暦は支配原理と結びついており、他にも月食や日食といった天象を正確に予測することや、暦と天体運行を一致させることは支配者の権威を示す上で極めて重要であった。暦の正確さを担保するためには、天体現象を把握したり、時の経過を測定したりする科

学技術力が必要となる。このため、天体観測や計時の道具を開発する高度な技術が求められ、それらは権威の表象とも密接に関わることになる。

- 長距離移動手段の発達、計時技術の精密化を要求した。現在の比較的統一された世界の時間秩序がグローバル化の所産であることは明らかである。
- 歴史を学ぶにあたって、年号の問題は避けて通れないが、なぜ年を重視するかというと、複数の出来事の時間的前後関係が物事の因果関係を考察する上での重要な手掛かりとなるからである。
- 歴史は道徳と結びつきやすい。人が過去に成した善行と悪行を材料にして、それを自らの行動を正すための鑑とする発想は、洋の東西を問わず見られた。歴史は倫理の素材を提供する格好の鉱脈であり、君主の鑑、人生訓としての道徳的歴史には絶えず需要があった。
- 暦を把握し、人間の歴史的営みを並べるという行為には、歴史に内在する意思を明確にしようという目的があった。エウセビオスは古代における一つの特殊な例であるが、歴史の展開に究極的な原理を認めようとする考え方が宗教的解釈と結びつき、後者が優先されてしまうことは時代を問わずに見られた。ランケは、証明したいことを先行させるのではなく、史料を批判的に解釈することで歴史的事実をより客観的に抽出することを主張した。
- アナクロニズムとは、現在の考え方を過去に当てはめてしまうことを示す言葉である。この言葉は、歴史事実を無視して、現代的解釈を適用する姿勢を批判する形で用いられることが多い。
- 歴史家は自分の理解できる形で過去の出来事をしばしば解釈してしまうため、その歴史記述は過去の忠実な描写よりも、著作家の時代文脈に合わせた形になってしまう。
- 歴史というのは常に引き継がれ人の手が加えられていくものであり、その伝承の過程には、加工を施した人々の考えや信念が間違いなく投影されているということである。

## 第 10 章：近代の知を問いなおす、歴史学・歴史叙述をめぐる問い

一言要約：ソシュールの言語論的転回によって、近代の知が問い直されるポストモダニズムの風潮が広まった。歴史学もその例外ではなく、歴史はその記述者の観点から描かれることは自明であり、全ての記述について客観性が保証されているものだと捉えてはいけないという問い直しがあった。

- 歴史家が投げかける問いや、その研究手法、史料の選択、分析や解釈は、歴史家が置かれた環境に大きく規定されており、歴史家はそうした自らの状況を認識する必要がある。
- スイスの言語学者ソシュールが 20 世紀前半に出した議論がある。世界にある事物や観念をどのように区分するかはあらかじめ決まっていらない。記号表現と記号内容との

間の結びつきはあくまで恣意的であると主張する。このような言語の恣意性という観点に立つと、先に実在がありそれを言葉が表しているという考え方が根元から揺さぶられ、むしろ実在は言葉があって初めて存在するという話になる。これは言語論的転回という名称で呼ばれることになる。

- 言語論的転回を考慮すると、史料は過去のある人物や出来事が実際にどのようなものであったかを表すものというよりも、ある人物やできごとを特定の姿に構築したものということになる。また、それまで当たり前のように用いてきた分類や概念についても、それらを所与のものとみなすことができなくなる。
- 近代の知のあり方を問い直す動きとして、ポストモダニズムと呼ばれる。
- 比較文学の研究者であったエドワード・サイードはオリエンタリズムで、西洋による東洋に関する言説は、西洋による東洋への支配・ヘゲモニーと結びついていることを多様な事例から示した。結果として、ヨーロッパ中心主義を広く指摘する動きと繋がった。こうした思想・学問潮流はポストコロニアリズムと呼ばれている。
- 南アジア近代史研究者のチャクラバルティは、第三世界における歴史学も含め、歴史学がヨーロッパ史の研究を参照しながら、ヨーロッパで生み出された理論を用いて展開してきたことに注意を促した。ヨーロッパの帝国主義と第三世界のナショナリズムによって国民国家という政治共同体が普遍化したことで、ヨーロッパで発達した歴史学が世界中に広まり、学校教育のなかに組み込まれたためである。ヨーロッパ中心主義への批判として、ヨーロッパを地方化する試みがあった。
- サバルタン研究グループとは、それまでの南アジア近代史の分野に見られたエリート主義的な歴史を批判し、「下からの歴史」を掲げて活発な研究・議論を転回した人々を指す。従属状態にある人々について書くというだけでなく、彼らの視点から歴史を再構築することにあつた点である。
- 最後の方で言いたいことは、歴史家はあらゆる人との対話を重視し、客観性よりも公平性を重視するべきだということ。

#### 第4章：人々のまとまりを捉え直す、歴史の中の国家と地域

一言要約：歴史叙述の思考の枠組みとして「国家」が多用されてきたが、それを盲信するのは誤りであり、設定された問題ごとに柔軟に重層的・流動的な「地域」を考えるべきである。

- 個々の国家を単位とする理解の仕方を一国史とよび、それに基づいた世界史の描き方を各国史的理解と呼ぶ。しかしこれには世界史は各国史の総和ではないという批判がある。第一の問題は、各国の歴史が孤立的・単線的に扱われてしまうことである。互いに影響し合うことなく歴史が展開していくことなど実際にはない。第二の問題は、国家という政治単位と個々の国家とは、歴史的に特定の時期に形成されたものであるにも

関わらず、固定的に捉えてしまうことになり、逆に過去を遡及的に切り取るという倒立が起きてしまうことである。歴史を現在の国家によって分断することになってしまったり、現在国家でないものを捨象することにもなったりしてしまう。第三の問題は、国家の内実の重層性を救いきれないことである。つまりある空間における住民と言語・文化・信仰・風俗習慣との組み合わせや重なりは多様であるはずなのに、一括りにして捨象されてしまうということである。

- 近世以降、主権国家や国民国家という国家形態がヨーロッパで登場し、近現代に世界標準になったから、以上のような考えが主流になってしまった。近代国家の成立以前、前近代の社会にはさまざまなまとまり方があった。第一は、人に支配の基礎が置かれていたということである。ただし人と言っても均質で均等に把握される国民ではなく、特定の領主や団体に属する存在であることが一般的で、しばしば生得的な身分制によって編成されていた。第二は、中心を軸に構成されていたということである。君主や王都など中心への連なりの総体が国家であり、その権力の及ぶ範囲は、中心からの同心円や動線によって把握された。第三は、その範囲を限る協会は線よりも面であるということである。明確な線ではなく幅をもつその一帯が協会であり、両属的・双方向的な空間であることも珍しくなかった。
- ネイションステイトすなわち国民国家とは、人は君主に属するのではなく国家に属し、その国家の主権は君主ではなく住民にあり、それを担うものが国民であるという考え方が前提にされている。国土と国民の一体性は、歴史的連続性と文化的同質性によって根拠づけられる。
- 20 世紀半ば以降、国民国家の摩擦・衝突がもたらした二度の大戦の惨禍をへて、このような国民国家を前提とした歴史把握に対する批判が強まっていった。まず生じたのは、対外侵略や成員の抑圧を伴った国民国家への批判と、それを支えてきた歴史理解への反省である。
- ネイションとしての民族への注目は、国家建設の担い手となるもののみをクローズアップすることになりやすく、また前近代の歴史を捉えにくい。そこで政治単位と結びつくネイションに代わって、文化的共通性・共同意識を重視したエトノスやエスニックグループを単位として捉えることが広まった。
- 強く意識されたのは、ある土地の歴史という意味ではなく、方法としての側面である。ある特定の範囲を地域として固定的に取り出して、その特徴や時系列史を積み上げていくのではなく、設定した課題に合わせて、大小広狭さまざまな範囲を地域として設定して、その重層的な構造や多重的な属性、不断に変化する相などを捉えていこうとする考え方である。
- 方法としての地域には、いくつか特徴がある。第一は、可変的で重層的な枠組みである。第二は、その地域の社会・住民の主体性・内在性・自律性の重視である。第三はタテの時間軸よりも、ヨコの空間軸への注目である。

- 海域とは、海を陸上の国家の付随物とみなすのではなく、視点を逆転させ海を中心に据えて周囲の陸域と一体のものと捉え、その空間内での人やモノ、情報の動きから歴史を描くための捉え方である。
- 海とそれを取り巻く周縁の陸域には、これら両属的、あるいはいずれにも属するとも判じ難い人々（このような境界人をマージナルマン）が多く存在する。
- 近世主権国家は、治下にある多様な政体・地域を君主が交渉・調停・妥協しながら結びつけているという点から複合君主政、また恒常的に組み替えや集塊・離脱が行われる点に着目して、岩石の比喻から礫岩国家などと呼ばれている。
- 遊牧民は、遊牧民だけで構成される国家ではなく、遊牧民が軍事と政治を掌握した上で、オアシス都市や農耕地帯の農民・商人・都市住民などさまざまな定住民を支配下におさめ、国際商人を取り込んで貿易・外交を担わせるという複合体であり、構成員の生業・言語・習俗は常に多民族的・複合的であった。
- 帝国は、多様な地域や民族を並存させながら単一の権力の下に緩やかに統合した政体をいうのであり、中核・上位の集団・地域が他を従属させる形で差等的に編成される代わりに、普通それぞれの内部にまで均質な支配が及ぶことはない。国民国家はこの逆で、国民の一体性を標榜する代わりに、多民族・多言語・他宗教の共存に不寛容だという点である。これは 19 世紀に強みを発揮したが、20 世紀に激しい内戦や民族浄化を引き起こした。
- 国家を社会と分かち難いものとして捉えて、国家と個々人の間にたち、関係を媒介する社会集団、中間団体に注目が向けられた。近世国家は中間団体が君主と関係を結んで国家の実体を構成し機能させた。このような社団的編成をとっている国家を社団国家と呼んでいる。
- 地域の重層構造の中にあらためて国家も位置付けを与えるべき。

## 第 5 章：現代社会の成り立ちを考える、グローバリゼーションの歴史的展開

一言要約：地球には政治的かつ文化的な「世界」というまとまりが点在しており、それらが時間を追うごとに接触しあい、現在のグローバル社会が形成された。歴史学にも国家の枠組みを超えて巨視的に歴史を捉えようとするグローバルヒストリーの思潮が見られる。

- 地球上には、政治的かつ文化的なまとまりがいくつか見られ、それらは互いに接触をもちながらもそれぞれ自律して存在していたと考えられる。＝「世界」
- 西欧の価値観が世界中に流布したのは、大航海時代以降の利潤獲得と、帝国主義時代の植民地主義の帰結である。
- バルカンの歴史：ローマ帝国支配下で徐々にキリスト教が広まり、その後東西に分かれる中、東ローマ帝国の政治的支配とギリシア正教会の強い影響を受け、バルカンは東欧世界の中に含まれた。東ローマ帝国が衰退する中、14 世紀よりアナトリアからバルカ

ンにかけて勢力を拡大したのがオスマン帝国である。ローマ帝国の継承者として東欧世界を支配すべき国家であると名乗りあげた国家としてモスクワ大公国があるが、当時のモスクワは小国であり、バルカンにオスマン帝国の支配を受けて帝国秩序にしっかり組み込まれた。支配が可能だったのは、キリスト教の信仰を認めるイスラームの教義と、帝国内の異教徒に一定の自治を与えつつ、彼らの不満を高めないようにするオスマン政府の現実的な統治にあったと考えられる。

- イスラームの世界観では、イスラームの法が十全に施行されている領域を「イスラームの家（ダール・アル・イスラーム）」・「戦争の家（ダール・アル・ハルブ）」と呼ぶ。前者の拡大のためにイスラーム教徒は絶えず戦うように努力すべきであるとされ、それがジハードである。
- 18 世紀後半のバルカンにおいて、政府の支配が弱まり在地勢力が互いに争う混乱した状況になると、オスマン帝国支配からの自立の動きがキリスト教徒の間で現れてきた。その際、ネイションステイト（国民国家）の考え方、すなわち言語や文化を共有することにより同じ共同体に属すると考える人々が、他のネイションを排除して一つの国家を持つという西欧起源の思想が自立の倫理として用いられ、次第に力を持った。
- 20 世紀後半になると、地球規模の視野で、すなわちグローバルに歴史を捉えようとする動きが現れてくる。それがグローバルヒストリーと呼ばれるものである。
- イマニュエル・ウォーラーステインの世界システム論である。ウォーラーステインは、16 世紀に西欧で始まった資本主義が拡大し、その範囲内で見られた中心・半周辺・周辺の三つのカテゴリーからなる分業体制を近代世界システムと呼び、それが西欧以外に存在する他の世界システムを包摂して、19 世紀には地球を覆い尽くしたと主張する。各国家の役割を重視せず、経済的側面を中心に巨視的に歴史を見るこの理論は、一国史観を乗り越える理論として歴史学に大きな影響を与えた。
- グローバルヒストリーの研究の特徴として、一つには地域間のつながりの重視、もう一つには歴史学を超えた学際的な研究であるということである。

## 第 6 章：植民地主義と向き合う、過ぎ去らない帝国の遺産

一言要約：植民地主義という問題は非常に複雑であり、帝国主義の遺産を批判的に捉えるポストコロニアリズムという思潮があるが、改めてその複雑さを認識し丁寧に事実を確認する「実証」の姿勢を意識することが大切である。

- 帝国による植民地支配は、ヨーロッパや日本などわずかな地域を除いた世界的な共通の歴史経験である。また、脱植民地化の結果として国民国家ができたことも共通した経験と言える。
- 支配された人々は国民という意識を持つようになり、国家として確固たる領土を持ち自決する権利、すなわち主権を強く要求した。帝国による植民地支配は、その反作用と

して国民国家の樹立を目標とする運動であるナショナリズムの興隆を促すことになった。

- 19世紀後半には、自分と他者を優劣で判断する世界観が強まり、それが広がった、民族を優劣によって判断し、自民族は他民族よりも優れているという国民感情が生じた、その上で、遅れた人々を自民族の基準にまで引き上げなければならないという帝国意識が国民に広がった。
- 社会ダーウィニズムとは、進化こそが生命の基本原理であり、時代とともに優性種によって劣性種が淘汰されるという考えで、この淘汰が人や社会の発展に援用された。
- 帝国主義とは、産業革命によって生じた技術革新と経済的優位性が、社会ダーウィニズムに結びつき、特定の国家が支配地域を拡大する世界規模の現象であった。つまり経済的現象が根底にあるのだが、この側面に注目し、帝国主義批判を行ったのがレーニンであった。
- レーニンは帝国主義論において、帝国主義を資本主義の最高の段階と位置付けた。資本主義が独占段階に達するともはや国内でそれ以上の資本蓄積を望めないため、独占企業は金融資本と結びつき、国外の資源を得ようとする。他方、資本家が多大な影響を及ぼす国家は、資本家を潤わせたり、国内の労使問題を解決したりするために、企業の進出先や人口の捌け口を得るべく植民地を求めるようになる。それぞれの帝国が植民地を獲得しもはや余分の土地がなくなると、今度は互いの植民地を奪うために帝国間の戦争が生じる。そこでレーニンは、資本主義に変わる政治経済システム、共産主義を求めた。
- 植民地支配下で作られた貧富の格差の大きい社会構造が独立後も継承されたとする新植民地主義論が大きな影響力を持った。
- 資本主義と帝国主義の親和性を逆手に取り、自由貿易帝国主義という考え方が提起された。これは、それまでの人種的または法的な植民地研究ではなく、海外投資などの経済現象に注目したものだだった。
- 植民地主義は明確な定義ができない、第一の理由は近代的統治そのものに関わる複雑さである、つまり統治権力の増大を植民地主義の本質とすることはできないということ。第二の理由は、植民地支配に至る過程やその結果出来上がる植民地社会は非常に多様であるということである。
- 植民地主義の大まかな特徴として、①協力システム：財政負担の少ない統治体制へと転換するために植民地教育などによって現地の人々の一部を現地人エリートにして中間官僚として採用し植民地統治に協力させるというもの。②人種差別的な行政中心の統治：宗主国人や現地人エリートによる寡頭制、または植民地総監に権力が集中する独裁制であったということ。③異法域：宗主国の住民に与えられるものと同等の権利が植民地住民に与えられることはなかったということ。
- 心理学や文学、文化研究の理論が援用され、知をめぐる権力関係から植民地主義の遺産

を批判する大きな思潮が形成された。冷戦終結を跨いで展開してきたこの思潮はポストコロニアリズムと呼ばれる。「何があったか」という実証で答える問いではなく、「どのような意識が生じたか」という入りくんだ解釈を伴わなければ答えられない問いが中心となった。影響①：ナショナリズムが想像、すなわち意識のあり方として取られるようになった。影響②：20 世紀の大規模暴力をどう論じるか、双方の暴力を描くべきか、植民地主義の暴力を清算すべきか。影響③：社会運動と歴史学の近さ。

- 脱植民地化は、もはや政治体制やイデオロギーの問題ではなく、抑圧された人々の意識の問題である。つまり、意識が変わらない限り脱植民地化がなされない。意識は特定の記憶から形成されるので、どの記憶に基づき歴史を論じるのかが問われるようになる。植民地研究は客観性の追求という崇高な目的を果たすことができなくなり、記憶をめぐる政治に巻き込まれ、学知よりも政治的立場の表明になってしまう。
- 実証という方法に立ち戻らなければならない。21 世紀において何が求められるのかを見定め、資料を広く渉猟し、丁寧に読み続ける。そして植民地主義の複雑さを認識し、それぞれの植民地を世界史の中に位置付け、「何があったのか」を地道に見つめ、その上で異なる立場の人々に「どのような意識が生じたのか」を考えるべき。